
仮面ライダーエヴィア 『伝説』を背負う戦士

シルフ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーエヴィア 『伝説』を背負う戦士

【Nコード】

N5230N

【作者名】

シルフ

【あらすじ】

風都の隣にある町、海鳴市。其処ではガイアメモリではない第2のメモリ、<レジェンドメモリ>がばら撒かれていた。そして、海鳴市にある中学校の生徒滝峰 蓮人はレジェンドメモリを使用して海鳴市を守る仮面ライダーエヴィアとして戦っていた。

「さあ、伝説は伝説へ環るがいい！」

伝説をめぐる戦いここに開幕！

（この小説はエターナルが使ったユニコーンメモリの説明をしようとして考え付いた小説です。もう一つの方が主体なので更新は不定

期
で
す
)

第1話 その名はE / 伝説を駆るライダー

漆黒の闇、少年はそんな中にただ一人存在していた。少年の周辺には自分の家族だった『モノ』。

「父さん・・・母さん・・・華音・・・」

少年はただその言葉だけを吐き出しつづける、その時その闇に一筋の光が差し込んだ。少年は自分が感じる久しぶりの変化に視線を向けた。

「君が、・・・くんだね？」

少年は僅かに頷いた。

「君は君の家族をあんな風にした犯人が憎いかい？」

「憎くないといえば嘘になる、けど、ここにいとそんな感情も馬鹿らしくなってくる」

「そうか、ならばそいつを殺したいか？」

少年は再び横に首を振った。殺すのではなく死ぬよりも辛い目に合わせてやりたいといった。

「そうか・・・、では問おう。君は『伝説』を背負う勇氣はあるかな？」

今度は少年はしっかりと頷きUSBメモリ状のそれを受け取った。その際その起動スイッチに触れると、闇に光が広がり音声で鳴り響いた。

【EXKARIVER】

5年後・・・海鳴市聖祥中学校昼休み

ここ、聖祥中学校昼休みでは毎日恒例の出来事がある。それは・・・暴動である！

「渡せ、このやきそばパンは私のだ!」

「ぬかせ、1年坊、貴様は餓鬼らしく素麺パンでも食っている!」

「コッペパン・・・確保完了」

「ちよっ・・・どこ触って、キャっ!」

・・・一部痴漢が混じっている様だが聖祥中の昼休みはこんな感じである。そんな暴動を前に1年C組高町なのはは困り果てていた。今朝彼女は寝坊をしてしまい弁当を持ってきていなかった。だから購買にこなかったのだが。

（うーん、噂には聞いてたけどここまで何てねえ）

そうして暫くすると暴動は収まり生徒はある者はホクホク顔であるものは昼食を確保できなかった事に絶望した顔であるものは痴漢被害にあったことを教師に報告に行っていた。

「あーあ、売り切れか・・・」

購買を見つづなのははため息をついた。結局あのあとなのははその騒動に入ることが出来ず昼食を逃してしまった。なのはは、どうしよっかなーと呟きつつ左右に視線をめぐらせる。

「ん、高町。どうかしたか?」

「あ、滝峰君。滝峰君こそどうしたの?」

なのはの目の前にいる少年は滝峰たきみね 蓮人れんと同じクラスの人物でクラスでは余り目立たないがいざと言う時はクラスの中心にそれとなく立ち物事を解決する隠れた有名人だ。

「いや、購買のおばちゃんに取り置きを頼んでおいたからその回収に。高町は・・・買い損ねたのか」

「にやはは、そうなんだ。だから今日のご飯は無しなんだよ」

「ふーん、そっか。じゃ、これどうぞ」

ポイツとなのははにパンを投げ渡し蓮人は去っていった。

（やつぱり、不思議な人だね。滝峰君って）

そしてなのははもらったパンの表紙を見て固まった。其処に書いてあったのは・・・十倍濃縮ハバネロ生クリームパン・・・だった。

「・・・もらったものは粗末には出来ないの」

「あ、やっときた。なのは、こっちこっち……ってどうしたの！？」

「最悪なパンをもらったの……」

「最悪？……げ、これってうちのパン食い競争に毎年はずれで放り込まれてる奴じゃないそれに貰ったって？誰に？」

今、なのはと話しているのはアリサ・バニングス、なのはの幼馴染だ。

「滝峰君……」

「なにやってんのよ、あんのバカッ……！」

アリサは思いっきり怨嗟の声を出した。

「む、なんか思いつきり恨まれている気が……。今日は良い事しかしていないのに」

蓮人は突如感じた寒気を肌で感じつつ目の前の『依頼人』にもう一度依頼の内容を確認する。

「もう一度依頼内容を確認するけど、依頼内容はストーカーの素性調査、及びその退治……だね？小塚さん」

「はい……、しかも最近は酷くなっていてこの前なんか庭が全部焼けていたし……」

（火属性のメモリか……、規模から見て恐らく低級宝具レベルのメモリ……火尖槍辺りが妥当か？）

「あの……聞いている？」

「ん？ああすまない。それじゃその依頼は引き受けよう報酬は前金千円、事件解決で追加で二千元、合計三千元で良いよ」

「そんなに、安くて良いの？」

「ああ、四六時中ついて上げれるわけでもないし。その代わり条件が幾つか。一つ、依頼期間中は極力此方の指示に従う事、俺の事を他言しない事、んで、これが最も重要なんだけど、解決方法について一切聞かないこと、オーケー？」

「それぐらいならいくらでも！」

「おし、契約成立！ジーク！」

「ピュイ！」

空から白色をした機械鳥、ジークが降りてきた。

「こいつを護衛につけるから何かあったら俺が駆け付ける。いいな？」

「うん、分かった。よろしく頼むね」

「りょーかい！」

その後、小塚と分かれ蓮人は階段を降りながら『相棒』に電話をかける。メモリの確認と情報を集めるためだ。

『やあ、蓮人。今回のメモリは火尖槍では無いよ』

「やつぱ、ジークを介して聞いてやがったか。んで、今回のメモリは何だ？」

『レーヴァンティン。世界を焼いたとされる剣だね、確か君は村雨のメモリを持っていたね。それで対抗するといい。装着者に関してはもう少しキーワードを集めてくれ、『記憶の本棚』でももう少し情報が無いと』

「オーライ、上手くやるさ」

『頼んだよ』

携帯電話を閉じ懷から擬似メモリを取り出す。

【STAG】

変形したスタッグフォンを空に放つ。それを特に意味も無く飛びまわるそれを眺める、蓮人にとってこれが集中するための行為なのだ。

（・・・そろそろ、局の連中も本腰を入れるかな？）

自分も持っているこのメモリも局の連中から見たら危険なロストロギアということになるらしい。ついでに今現在持っているメモリを思い出す。

（今現在持っているメモリはエクスカリバー、村雨、デュランダル
の3本。アヴァロンのメモリは行方不明、低温に弱い相手や固い外
郭の相手になら何とかなるけど高温に弱い相手にはいまいち決め手
にかけるな）

「レーヴァンティンのメモリ、頂くとしますか！」

放課後、帰宅していた蓮人はジークからの連絡を受け取った。場所は余り離れていない、急げば間に合うだろう。

「さーて、お仕事の時間だ！」

「行つてらっしゃい」

「出歩くんじゃないぞ、エール」

蓮人は相棒であるエールに注意を言つと現場に向かって走り出した。

「無事か、小塚！？」

「あ、滝峰君・・・」

（・・・上級メモリの威力はやはり凄まじいな。メモリの力に溺れたか）

「君は誰だい、僕の・・・僕の小塚さんに触れるなあっ！」

そう言うと共にレーヴァンティン・ドーパントは手に持った剣を振りかぶって襲いかかってくる。それを避け後退する。

「小塚さん、逃げろ」

「え、でも・・・」

「いいから早く！」

自分のことが心配なのだろう、それでも蓮人の声に押されて小塚は走り去った。

それを確認した後蓮人は再びドーパントのほうへ向いた。

「何故・・・何故僕から逃げるんだ・・・。僕は彼女をこんなに愛しているというのに最強の力を手に入れたというのに!？」

「お前は道を違えた・・・強大な力に酔い我を通そうとした。だから拒絶されたんだ。だから・・・戻してやるよ、この町を護る俺が・・・な」

そう言うとき蓮人は懐からひし形をしたドライバー、レジエンドライバーを取りだし腰に取り付ける。右腰にはマキシマムスロットが取り付けられている

そしてもう一度懐にいれUSBメモリの形状をしたもの、レジエンドメモリのうちの一つを取り出す。

「そ・・・それは!？」

「行くぜ・・・変身！」

【EXKARIVER!】

【EXKARIVER!】

レジエンドドライバーの右側からエクスカリバーのメモリを差し込む。すると空から光が差し込みレーヴァンティンドーパントの目を焼く。光が収まると其処には青を基調とし所々に銀色の装甲をまとい顔は王の威厳を持つ仮面に覆われていた。

「お、お前は何なんだ！」

「この町を護る仮面ライダーエヴィア。ドーパントよ、さあ、伝説は伝説へと環るが良い！」

そう言うときエヴィアは走り出しレーヴァンティンドーパントに殴り

かかった。一発殴る度に火花が散る。だが、ただ一方的にやられるドーパントではない剣をふるいエヴィアに強制的に距離を取らせる。「やれやれ、仕方ないか。こっちも武器を使わせてもらおうか」そう言うとは何時の間にか近く似合ったバイク、マシンナイツァーから記憶剣ログブレードを取り出す。そしてもう一本メモリを取り出す。

【MURASAME!】

【MURASAME!】

メモリを差し込むとログブレードは見た者を見惚れさせるほどに美しい刀、村雨に変化する。再び距離を詰め村雨を振るいドーパントの肉体を次々と切っていく。切るたびに高圧水流が飛び出て追加攻撃していく。

「そろそろ、終わりにしますかね」

一旦距離を取り、村雨を地面に突き立てレジエンドライバーからエクスカリバーメモリを引き抜きマキシマムスロットに差し込む。

【EXKARIVER MAXMUMDRIVE!】

「エクストライク！ハアアアッ！」

高エネルギーを纏ったキック、エクストライクがレーヴァンティンドーパントの胸に決まり爆散した。排出されたメモリをキャッチしてエヴィアはため息をついた。

「ふう……どこのどいつだよこんなものばら撒きやがった奴」

「あ……あの滝峰君」

「おお、小塚どうし……へっ!？」

「その姿って？」

エヴィアはあーうーといったあと……………逃げ出した。

「あ、ちょ、滝峰君!？」

「三十六計逃げるにしかずうううううう!」

エヴィアは素早く逃げバイクに飛び乗り去って行った。

「……………一体全体何なのよおおおおおおつ!？」

小塚の叫び声が虚しく響いた。

第2話 その名はEノ町を守るはライダーの使命！

ドーパントを倒した翌日、蓮人は朝食を作るためにキッチンへ立っていた。卵をフライパンへ入れ塩胡椒をかけ火を切り余熱で焼いていく。その間にパンをトースタに放り込みベーコンを電子レンジに放り込み一分加熱する。

「さて、そろそろ来るころあいか？」

「何やってるの、蓮人」

「客人をもてなす用意さ。俺が仮面ライダーってばれちまったし事情を聞きに来るだろ」

「まったく、何やってるの蓮人」

その時、チャイムが鳴り来客を知らせる。エプロンを取ると蓮人はドアへ向かう。

「いらつしやいませ、依頼人殿？」

「挨拶は良いから事情を聞かせてもらうわよ！」

「そんなに急がなくても話すよ。朝メシまだだろ、食べるか？」

おながが減っていたのだろうか、小塚は反論をせず頷くと蓮人の後ろについて食卓へと向かう。その様子を二階の柵にもたれかかりながら見ていたエールは一つ欠伸をした。

（・・・久々に兄さんに会いに行こうかなー）

ぼんやりとした頭でエールは思考をめぐらせる。長い髪をがしがしかくと二度寝する為に部屋に戻り布団をかぶった。暫くすると寝息が聞こえたのであった。

「つまり、あの力でレジェンドメモリって言うのを回収、破壊してるわけね？」

「概ねはそう、一部回収して流用してるものもあるけどね。因みに

レジェンドメモリには幾つか種類があつて例をあげると

『宝具メモリ』

俺の使つてゐるエクスカリバーや村雨はこれに入るかな。宝具メモリは三つの等級に分かれていて低級、上級、最上級メモリに分かれるんだ。最上級のメモリは今現在二本しか確認されていない、このエクスカリバーともう一つ『Eのメモリ』だ」

その時蓮人の顔にわずかに暗い影が落ちたが小塚はそれに気付かず問いを重ねる。

「Eのメモリって、何？」

「俺もメモリの名前はまだ知らない、ただ、メモリの頭文字がEである事、属性が風である事、その2点しかわからない。

次に説明するのは、『幻獣メモリ』

ユニコーンやリヴァイアサンなどがある。このメモリの特徴としては装着した人物の肉体が限界以上にまで引き出される。装着者に危険をもたらすレジェンドメモリだがこれは郡を抜いている。一人の装着者が使用出来るのは一回だけだ。これも等級が三つに分かれている。このメモリについては俺達も余り理解できていない。

まあ、こんなところかな。あとはこのドライバーなんだけど、メモリの毒素を中和して安全に使用することを目的に作られた」

「じゃあ、あの姿もドーパントってこと？」

「似たようなものではあるかな、俺は仮面ライダーって呼んでるけど。まあ、説明はこれで終わり。これからどうする？ 深入りはお勧めしないよ」

小塚は頭をひねる。確かにこれにかかわるのは危険だ、だが、このチャンス逃せば何の刺激もないただの学生生活に戻る事になる。そこで、小塚はある妙案を思いつく。

「じゃあさ、私があんたの探偵稼業を手伝ってあげるから。そして深入りもしなくて一石二鳥でしょっ！ 決まり！」

「・・・あのさあ」

人の話し聞こうよ、と言おうとした瞬間小塚は出て行ってしまった。

予想外の展開に固まっていた蓮人は追えずにため息をつく。

「まったく、ああ言う所亜樹子さんにそっくりだよな」

「まったくだね、ところで学校に行かなくて言いの？遅れるよ」

「わーってるよ、行ってくる」

「行つてら」

「ういゝつす」

「おお、蓮人！」

「ん、どうした骨？」

「骨じゃねえつ、あは亜茨だ！・・・まあ良い、お前探偵やつているらしいな？」

「なんで・・・いや良い、大体分かった」

蓮人は黒板に堂々と書いていく小塚を見る。頭を抱えながら黒板に近づき学校標準のスリッパを取り思いつきり頭を叩く。

「あだつ！？何すんのよ！？」

「口外しない事が依頼する条件だろうが。大々的に宣伝するんじゃない！」

その言葉に言葉が詰まる小塚。

「もう良いから、これ消しとけ。そうすりゃ噂も・・・。駄目だな骨が見ちまつたし」

後ろから亜茨だー！と言う声がしたが無視して置いておいた鞆を掴み教室を出る。ちょうど来た担任にどこに行くか聞かれて返りまーすと普通に返した。

（今日はエールに付き合つてやるかな）

「ただいま」

「あれ、もう帰ってきたの、学校は？」

「サボった、小塚が盛大にばらしてくれたからな」

「ご愁傷様。これからどうするの？」

翔太郎さん達に会いに行くと言い、自室に戻り着替え始める。流石に制服で歩き回るのは不味いからだ。因みに服装は薄手の黒いシャツにジーパンと言うラフな格好だ。

「さーて、行くとするかね」

「ん、よろしく」

短い会話を終わらせマシンナイツアーに2人乗りし発進させる。今から向かうのはエコロジーの街『風都』だ。其処に住む自分に探偵の基本を教えてくれた恩人に会いに行くのだ。

「それにしても久しぶりだよな、翔太郎さんたちに会いに行くの」

「そう言えば、蓮人はそうだったね。私はちよくちよく行ってたけど」

「……最近ガソリンの出費が増えていたのはお前の所為か」
蓮人の声に適当に笑うエールにため息をついた。そして余り使うなと言い含めるとエールはやけにあっさり応じてそれをいぶかみつつ蓮人はバイクを走らせる。

暫く走っているとスタックフォンに電話がかかってきた。一旦バイクを止め電話に出る。

『あ、ヤッホー。小塚です、依頼が入ってk【ブツ】ツーツーツー』
電話の相手が小塚と分かった瞬間蓮人は電話を切った。

誰だって厄介事には巻き込まれたくないからトラブルメーカーは避けるだろう。

だが数十秒もしないうちに再び電話がかかってくる。このまま無視

してもうるさいだけなので電話に出る。

『・・・なんで電話かけてすぐ切るのよ』

「誰だってトラブルには巻き込まれたくないさ。で、依頼ってのは？」

『ああ、それなんだけどさ。ドーにもドーパントの仕業っぽいのよね』

その言葉に蓮人は表情を引き締める。どのような奴であろうとメモリを使う奴にロクな奴は居ない、自分を含めてだ。

「依頼人とドーパントだと思った理由を詳しく」

『依頼主はアリサ・バニングスさん、ドーパントだって思った理由はアリサさんの家の警備を掻い潜ったんだけど・・・』

「それだけなら上手く侵入しただけじゃないのか？」

『ところがどっこい警備に引っかけた警備員が来たんだけどその人が化け物を見たしその人からとった調書も見ただけで私の見立てによると村正っぽいんだよね』

「分かった、これからバニングスさんの家に行って話を聞いてくる。その間は依頼止めておけよ」

『流石にそんな事は分かってるよ〜！』

「と、言う事で今日の予定はパーだ。先に帰っててくれ」

「仕方ないね、りょーかい」

エールは、それだけ言うとは処かへと歩き出した。それを確認して蓮人はバイクのエンジンをかける。

走りながら今回出たメモリについて考える。

（今回出たメモリは村正、妖刀としても有名な刀だな・・・十二分に上級のメモリに入る。日本のメモリなら『ムシャ』で対抗するか）

蓮人は首をコキリと鳴らすと依頼主の家であるバニングス家に向かった。

（たまに思うけどお金持ちの家でもチャイムの音はピンポーンの音なんだよなあ）

目の前で開いていく門を見たまま蓮人はぼんやりと思う。

『お客様、そのまま真っ直ぐお進みください。バイクは近くの者に預けていただければ結構です』

近くのスピーカーから聞こえてくる壮年の男性の声―確か鯨島と言う名前だったはず―が先導する様に声をかけてくる。

マシンナイツァーは門番みたいな人に預け徒歩で遠目に見える建築物に歩み寄っていく、建築物の前で足を止めた。

そこにはムキムキマッチョの黒服SPが待っていた。

「お客様、失礼ですがボディチェックを受けていただきます」

「え、ええ、分かりました……」

（……あんま触られたくねーな、え、ちよつ、どこさわもあぎやあああああつ！？）

「うう、もうお嬢に行けない……」

「どこの箱入り息子よ、あんたはっ！？」

「にやはは……」

あのテカテカしたボディチェックを（精神的な意味で）終えアリサの家の室内庭園でお茶を貰っていた。

因みに蓮人にあのトラウマを刻み込んだボディガード達は既に何処

かへ消え去っている。

「それにしても、何でここにいるんだ？高町、八神、ハラオウン、月村」

「ま、いろいろあるんよ。ところで滝峰君は・・・なんで？」

「依頼されたからな、探偵なら依頼されたら動く、当然の事だろう？」

「ええっ！？滝峰君って探偵だったの！？」

「たはは・・・」

ばらすつもりなかったのになあ・・・、と蓮人はぼけっと思うがそうこうしているうちに蓮人のカップが空になったので鮫島さんに頼んでおかわりをついでもらった。

「あんた、かなり馴染んでるわね」

「まあな、目立たないようにしているだけだが」

「それはもう一種の特殊能力ちゃうんか？」

はやての突っ込みにみんなが笑った。

まあ、くだらない話はここまでにして・・・、と蓮人はふざけていた表情を消し真剣な表情になった。

「依頼の内容は不法侵入した人物の特定及び確保、報酬は3万。これでもいいな」

「あ、うん、良いけど。どうやってあんな化け物に対抗するの？」

「それは秘密、さてと・・・ジーク！」

『ピュイイツ』

「わっ！？」

「きゃっ！」

蓮人が呼びかけると空から白い隼型のガジェット、ジークが舞い降りてきた。

暫く飛びまわると差し出された蓮人の腕に止まった。

「ななな、なんやそれ！？」

「汎用多目的隼型捜査ツール、通称ジークだ。こいつにバニングスさんを護衛してもらう」

「え・・・こんな可愛いのに出来るの？」

「ま、何とかいけると思うぞ。じゃ、頼んだぜ、ジーク」

『ピュイ♪』

腕に止まっていたジークが再び飛び立ち何処かへ飛び去った。

蓮人も席を立ちバイクの元へ向かった。

「滝峰！」

「ん、なんだ？」

「・・・あながとね」

「おう」

立ち去る蓮人の口元には僅かな笑みが浮かんでいた。

バイクを走らせていた蓮人は今回の事件の首謀者に関して考えをめぐらせていた。

（今回の犯人の侵入ルートを考えれば対象は間違いなくバニングスさんだ。問題は何故バニングスさんなのかだ、狙うならご両親でも構わないはずなのに何故バニングスさんなのか、だ。バニングスさんには恨まれる理由がない、他の4人に聞いても同じだった。痴情のもつれの線に關しては八神さんがしっかり否定した、だとすると狙われる理由がますますわからなくなる。残る理由としては・・・）
バニングス社に関するトラブル、そこまで思考がいった時目の前に火花が散った。

咄嗟にナイトアーを止め火花が散った原因に目を向ける。

「ドーパント・・・か」

『この件について関わるな・・・ッ！』

「・・・なんだと？」

『貴様のような餓鬼が関わって良いほどこの件は甘くない、死にたくなかったら手を引くがいい。早くバニングスの心臓を手に入れないければならないのだ』

どことなく落ち武者を思わせるドーパントはそれだけ言い残し去っ

て行った。

その後に残ったのは何とも言えない気分だった。

「……………手引いてたまるかってんだ」

（それにしても……………心臓ってのはどう言う事だ？）

ナイトツアーを走らせ家路についた。

「遅かったね、蓮人」

「変な奴がいたからな」

「変な奴？」

「ああ」

蓮人はドーパントに襲われたことを話すとエールは眉をひそめた。

「それってさ、バニングス家を見張ってたって事？」

「だろうな、もしかしたら盗聴器や隠しカメラも仕込まれている可能性がある」

その言葉にエールが押し黙り何事かを考え始めた、どうやらスイッチが入ったらしい。

第3話 その名はE/悲しき娘の瞳

「さて、検索をはじめよ、蓮人」

「ああ、キーワードはバニングス、村正」

自身の意識内にある記憶のデータベースに居るエールは検索用のキーワードを打ち込んでいく。

目の前にある液晶画面が次々と必要な情報だけを残して消えていく。だが、それでも無数の情報が残る、これでは犯人の特定は難しいだろう。

「蓮人、もうちょっとキーワードはない？これじゃあ、犯人の特定は出来ないよ」

「……キーワード、か。他に考えられるのは……」

『はやくバニングスの心臓を手に入れなければ……ッ!』

「……」

「蓮人？」

（この推測が正しいなら……悲しい事件だなこれは。名も知らない犯人よ、同情するぜ）

「キーワード追加、《心臓》、《心臓移植》」

言われた単語を打ち込んでいくと情報が次々と消えていき……ある人物の情報が残った。

その人物の名は荒木 圭太、バニングス家で執事見習をしており娘が一人居るそうだ。

だが、その娘は先天性の心臓疾患を抱えているらしい。心臓移植のレシピリストのトップに載るほどの。

「やはり……か」

「どうする、蓮人。この事件、見逃す？」

「な、何言ってるんだ、エール!？」

「蓮人は今迷ってる。そんなんじや信念と狂気を貫くこの人を止められないよ。まだまだ君「うるさい!」」

「確かに俺はまだハーフボイルドかも知れない、だが、同時にこの町を守る唯一の仮面ライダーでもある。たった一人のエゴの為に多くの人が流す涙を見たくはない!」

「なんだ、心は決まってるたんじゃないか、蓮人」

「ああ、……っともうこんな時間か、ご飯にしよう」

「ラジャー」

ご飯を食べ終わると改めて荒木 圭太について検索を開始した。

「彼の娘さんは今、海鳴病院で静養しているそうよ。ちなみに小学

五年生」

「……そうか」

「どうしたの？今更迷っているなんて言わないよね？」

「そんな事は言わないさ、ただ少しかかりな事があってな」

「……？」

「杞憂ですむと良いんだが……」

ポツリと呟いた蓮人は帳簿整理を行っていた。
だが、その手は先程から動いていなかった。

翌日連人はエールに行き先を告げずある場所へきていた。

「……」

海鳴病院と書いてある看板を前に連人は踏み出そうとしてある人を見つけた。

どことなく顔が青く、体調が悪そうだ。

「すいません」

「え．．．．あぁ、お嬢様のご友人の」

「滝峰です、少々伺いしたいことがあるのですが」

「えーと、なにかな？娘を待たせているからね」

「．．．．聞きたいのは貴方が買ったというレジェンドメモリのことです」

そう言うのと荒木の表情が抜け落ちた。
体もカタカタと震えている。

（やはり．．．．か）

「貴方ですね、レジェンドメモリを購入したのは」

「き、きみは．．．．？」

「ただのしがない中学生探偵です。村正のメモリはどこに？」

「し．．．．知らない！買って数日してからどこかに行ったんだ！どこにあるかは知らない！」

その必死な形相に蓮人は嘘をついてはいないと感じた。

そして、蓮人は歯噛みした。何となくは予想していたが実際にあるとは思わなかったからだ。

「．．．．そうですか、では、昨日俺がバニングス邸を辞してから貴方は？」

「さ、鮫島執事長についてお嬢様のお世話をさせていただいていた

が」

（決まったか……）

頭の中に描いていたパズルのピースが全て埋まった。

この真実を確かめれば良いだけなのだが。

（つくづく俺もあまちゃんだな）

「荒木さん、今日はこのままお帰りください」

「な、何故かね、私は娘に……」

「娘さんがレジェンドメモリを所持している可能性があり、それを回収・破壊するのにあなたは邪魔になりますのでどうかお引き取りを」

荒木は動揺していたが付いてくると言った。

しかし

「ダメです」

「な、何故だ!？」

「娘さんがメモリに毒されている可能性があり正常な状態に戻った時貴方を傷つけたと知ったら心に大きな傷を負います。そうなら無い為にも貴方はここに居ない方が良い」

「……あ……」

納得したのか荒木は帰っていった。

気を取り直して蓮人は病院ないに入っていた。

「荒木……小百合ちゃんだね？」

「……お兄さん、誰？」

「俺は滝峰探偵事務所の探偵、滝峰 蓮人だよ。今日は小百合ちゃんに聞きたいことがあって来たんだ」

「聞きたいことってなあに？」

「君のお父さんが買ったメモリはどこにあるんだい？」

その言葉に小百合の目が震えた。

蓮人はため息をついた、ここまで予想が当たると嫌になってくる。

「小百合ちゃんが……持ってるんだね？」

「私……私……アアアアアアアアアアアア！」

【MURAMASA!】

「なにッ!？」

『バニングスの心臓が欲しいイイイイイツ!』

現れたのは昼間の奴とは違う紫と朱を基本とした日本刀を二振り持

ったドーパント、それを見た蓮人は咄嗟に部屋の外へ飛び出して周りの人へ避難を促した。一瞬周りの人はポカンとしていたが蓮人の後に出てきたムラマサドーパントをみて一気に逃げていった。

（どうするッ！？下に降ろすのは論外だ、一般人に迷惑がかかる。それなら………屋上だ！）

「こっちだ……ついて来いッ！」

[illegible]

ワザと大きな動きをすることで注意を引きつつ蓮人はムラマサドーパントを屋上へ誘導する。

暴走するムラマサドーパントを横目に見つつ蓮人は思考を巡らせた。
（あの様子からすると小百合ちゃんは過剰適合者……？ いや、
それならメモリが常時体内に取りこまれてるはずだからそれはない
な。だが自動起動したところを見ると通常の人より適合率が高い、
言うなれば準過剰適合者ってところか？）

推測は推測でしかないので思考を打ちきり屋上に続くドアを開けようとして……開かなかった。

「……不幸だ」

こんなタイミングで開いてなんて本当に運が悪い。

蓮人としては日頃の行いは悪くないのにどうしてこうなったという
 感じた。

「ぶるああああッ！」

「女の子なのに若本皇帝の真似してどうする!？」

そんなツツコミをものともせず村正ドーパントは扉を両断した。
それをラッキーと思いつつ蓮人は屋上に飛び出た。

「ここまで来たら大丈夫だな、行くぜ！」

《EXCHARRIVER!》

左の胸に拳を当てメモリを持ったてを右腰に持っていていき自身の姿を
変えるキーワードを呟く。

「変身」

《EXCHARRIVER!》

光に包まれその姿を海鳴市を守る仮面ライダー、エヴィアに変える！
変身を終えた蓮人、否、エヴィアはムラマサドーパントに指を突き
つける。

「さあ……………お前の罪を数えろ」

『アアアアアアアアアアアアアアッ!』

何時の間にか手にあつたログブレードでムラマサドーパントと切り
結ぶ。

やはり妖刀に堕ちた刀とは言え伝説に数えられた名刀、ただの刃で
あるログブレードでは防ぎきれない。

防いだと思つたらその衝撃だけで鎧が切られている。

（なんつー厄介なメモリだよ!?!どうにかするには…………ムシャが一
番か?）

「仕方ない、行くぜ！」

《MURASAME!》

《MURASAME!》

「さあ、行くぜ！」

ムシャフォームになって腰にマウントされた二振りのログブレードを構えムラマサドーパントに切りかかる。

このフォームの特徴は高速機動による攪乱と一瞬の隙を突いたヒットアンドアウェイの戦法。

だが敢えて蓮人は退かず密着してムラマサドーパントを切り続けた、下手に離れると此方が殺られてしまうので極力離れないようにしている。

「よ、ほ、……ってどわッ!？」

『グラアアア!』

「あーもー、このメモリ面倒臭いな。小百合ちゃんの体もやバイだろっし……って!？」

エヴィアが驚いたのにも無理は無い突如ムラマサドーパントから血のように紅い霧が出てきたかと思うと周囲にある金属を吸い込み始めた。

そして集まった金属は徐々にムラマサドーパント集まって巨大な鎧武者と巨大な村正を持っている。

そのサイズはかつて風都に現われたT・レックスドーパントの暴走

態と同等の大きさ、その大きさに蓮人は舌打ちした。

このサイズでは屋上に退避した意味が無い。

せめて下の人達に被害が及ばない様に攻撃を避けつつガタツクフオンでマシンナイツアーをタービュラーモードで呼び出す。

飛来したナイトタービュラーに跨り攻撃を避けつつ装備されたバルカンからエネルギー弾を放ちムラマサドーパントの足止めをする。そこでエヴィアは舌打ちをした。

けたたましいサイレンの音が聞こえたからだ。

これはドーパントを刺激し彼らを危険に晒してしまう。

『おい、その巨人と奇人！さっさと武装解除して投降しろ！』

(・・・刀野警部、何であんたが来てんだよ)

知り合いの刑事が居る事に頭を抱えつつエヴィアは更に攻撃を加え続ける。

そんな時、エヴィアの耳にかすかな声が聞こえた。

『(・・・・・・・・・・て)』

「え？」

『(助けて・・・これ以上パパを苦しめたくない、ママを嫌な気持ちにさせたくない)』

それは素体となった小百合が抱えていた思い、なのだろうか。

自分の体が弱いから父に負担をかける、母親の手をわずわらせる。

そんな自分が嫌で嫌で仕方なく、それで小百合はそんな境遇を変えるべくアリサの心臓を狙った。

親の事を思い、その思いにつけ込まれたように売られたレジェンド

メモリ、一つの線に繋がった事件の真相にエヴィア、蓮人はその仮面の奥で歯を食いしばった。

（ゆるせねエ・・・こんなに、こんなに家族の事を思っているいたいけな少女にメモリが渡るように仕組んだ、ディーラーどもが・・・ゆるせねエッ！！）

「その思い、確かに受け取った。だから、もっと沢山の人に迷惑をかける君を...止める！」

【MURASAME! MAXIMUM DRIVE!】

「流水波斬！セイヤアアアアッ！」

エヴィアの手に水が纏われ飛びあがりムラマサドーパントを切断していく。

工場でも使われる高圧水流の刃は同じ鉄のムラマサを切り裂いた。切り裂かれたムラマサドーパントは爆発し、そこには気を失った小百合だけが残された。

そしてその横にはマキシマムによって力のほとんどを失ったムラマサのメモリが。

それを手に取りエヴィアはゆっくり力を込めメモリをブレイクした。

「これで今回の依頼は終了だな」

小百合を抱えると病室に下りていきそつとベッドに戻した。

今回の凶行はメモリに体の制御の大半を奪われていたからだろう、じきに目覚める小百合は何も覚えていないだろうしこれ以上何かがおきることはない。

「さて・・・・・・・・帰るか」

蓮人は知らない、屋上に打ち捨てられていたメモリの残骸を何物かが回収した事を、そしてムラマサドーパントが異世界であろうと確実に気付かれる魔力を放っていた事を、そしてメモリを扱う秘密結社ミュージアムの流れを汲む組織に目をつけられたことを。その物語が眠りから生まれ様としていた事を。

第4話 出会いのE / 混乱する戦場

滝峰蓮人は窮地に立たされていた。

「どうしてなのはにあんなパン渡したの？」

「いや、あの、テストロッサさん？」

目の前に立つのは金色夜叉……ではなくフェイト・T・ハラOWN。蓮人の学年においてアイドル扱いされるほどの美人だがよく学校を早退するので余り姿が見れないのが残念と言われている。性格は穏和と言われているが蓮人の前に居るのはまるで夜叉、熟年の戦士を思わせるほどその気配は鋭い。

「もう一度聞くと、なんでなのはにあんなパンを渡したの？」

「パ、パン……？」

蓮人は首を捻るが思い出せない。

（よし、検索を始めよう。キーワードは『高町なのは』、『パン』、『フェイト・T・ハラOWN』……、あれかあああっ！？）

蓮人の脳裏に浮かんだのは村正のメモリの事件の時の記憶だ。確かにあの時なのはにパンを渡した記憶はある。

だが、蓮人からしたらあれは工夫したら十分な美味しさがあるのだが……

「もしかして高町、あれをそのまま食べたのか？」

「どういつ事？」

「い、いやあればな、購買で売ってる『激甘！ゲシユタルト崩壊！』を一緒に食べるんだけど……」

「……商品の名称はともかく、なんでそれをなのはに言わなかったの？」

「いや、包装紙に表記されてるぞ？」

沈黙、そしてフェイトは逃走した。

そのスピードや、まさに金色の閃光だと骨は後に語ったとか……それはともかく蓮人はフェイトの奇行に首を捻りつつ食べかけだった『まるごとアツポウ』と言う謎のサンドイッチを食し始めた。

「フム、なかなか面白い人柄のようだね。テストロッサさんは」
「こっちは絡まれて大変だったんだからな？」

自宅に戻って来た蓮人はまるで全部見ていたかのような発言をしていたが実際に見ていたのだ。

ガジェットツールの一つのジークは彼女の目なのだ、基本的に外を飛び回っているジークを介して大抵の場所は見ることが出来る。

その機能を利用して学校の様子を見ていたのだろっ、あまり良い趣味とはいえないが。

それはともかく蓮人はある手紙を受け取っていた、差出人は「左

翔太郎】、蓮人に探偵のいろはを教えた人物であり、また、風都でガイアメモリを破壊し続ける仮面ライダーWでもある。

「翔太郎さん、どうかしたのかな……？」

「なになに、フィリップおじさんから？」

「あー、教えてやるから引っ付くな」

覗き込んでくるエールを手で追いやりつつ封を切る。

メールで送れば良いのにわざわざ手紙なのは何かしらの理由があるのだろう……。

だがそんな思いとは裏腹に書かれていたのはただの近況報告、それにエールは期待はずれとでも言うかのようにため息を吐いたが蓮人は改めて手紙が入っていた封筒を手に取り観察する。

「……このパターン、それならこの内容と加味すると」

何事かをぶつぶつ呟きながらスタッグフォンのメールに次々と文字を打ち込んでいく。

そうして出来上がったメールの文章を読むと蓮人の表情が驚愕に満ちた。

「マジかよ……」

「どしたの、蓮人？」

「風都のミュージアムの後継組織が作ったガイアメモリとレジエンドメモリの……言っなればキメラメモリが行方不明になったらしい」

「それって……かなりヤバイよ、ね」

「ああ、地球と伝説の融合……すなわち現実と幻想の統合。そんなのが暴れまわるのは防がなきゃいけない」

「うん、そうだね……」

神妙な顔で二人は頷きあう、幻想は所詮幻想でしかない。そんなのが現実にあっていいはずがないのだ。

決意を新たにした二人は手紙に同封されていたDVD-ROMをパソコンに挿入、中身を確認する。

記録されていたのはレジェンドメモリの販売人に関する情報。容姿はスーツを着た若い男性らしい、それだけなら特徴は無いに等しいが情報には続きがあった。

その男はネクタイではなくスカーフをつけているらしい、そのスカーフが特徴的で黒地に青い丸が着いているのだ。

「まるで園咲霧彦みたいな奴だね……」

「関係ない、この町を泣かせるやつは叩き潰す。それだけだ」

「気合い入れすぎないようにね？」

「分かってるよ……ん？」

スタックフォンに着信が入ったことを知らせるバイブレーションが起きていた。

相手を確認すると……

「小塚さんか……」

「なんだか厄介事な気が……」

一瞬切ろうと思ったが後でうるさいだろうという予想が簡単についたのでとりあえず電話にでる。

「……どしたの？」

『いやーそれがまた依頼人が』

「帰れ」

用件を聞いた瞬間即刻電話を切った蓮人。

よっぽど村正の事件で懲りたのだろうか……

が、この行動は前回と同じ。しかし小塚の行動はバージョンアップしていた。

唐突に玄関が開いたかと思うと小塚が飛び込んできた、あらかじめそこに待機していたのだろうか？

「ふふふ、甘いわね。人は常に進化を続けてるのよ！」

「それが不法侵入したやつが言う台詞か!？」

「フツ、何時だって進化は理解されないものね」

何気にどこぞの金色のドラゴンモチーフのライダーに喧嘩を売る台詞を吐きつつ小塚はドカッと椅子に座り込むと抱えていた書類を蓮人に滑らせるように渡す。

それを受け取った蓮人は視線を向ける。

「これは？」

「今回の依頼、家出人の搜索よ」

「家出人？ そんなの警察に任せろよ」

「そういう訳には行かないのよ、その中の見てみて」

言われるがまま中の書類を見ようとして蓮人は思考停止した。
その資料には菊の紋、つまりは警察の紋が押されていた、固まった
まま蓮人はゆっくり資料を元に戻し……

「あ、警察ですか？」

「オイコラーツ！？ あんた何警察に電話してんだこら！？」

「気にするな、冗談半分だ」

「半分は本気なの！？」

ふざけた会話をしていたが落ち着くと改めて資料に目を通していく。
そこに書かれていたのは唯一見つかった家出人の証言だ、曰く何か
歌のようなものが聞こえた瞬間意識が飛び、次に目覚めた時には海
鳴沖の孤島に居た化け物に襲われたが近くにあったボートを使って
逃げ出しその後警察に保護されていたそうだ。

「歌……、それに孤島か。水系統、しかも海に関するメモリかな……
……？」

エールがメモリの属性と特徴を鑑みて記憶のデータベースとの照合
を始めている。

だがこの情報だけではメモリの特定は難しいだろう。
水や海に関する伝説なぞそれこそ無数に存在するのだから。

「分かった、この依頼引き受けさせてもらう。レジエンドメモリが
関わってる可能性があるなら俺達の領分だ」

「よっしゃ、なら依頼人に伝えてくるわ。あ、その資料事件が終わ
ったら焼却処分してね」

「やっぱり違法性ありの資料かよ!？」

なんともしまらない会議の終わり方である。

「えーと、ここか？」

『うん、そこで間違いないよ。そこが第一の家出人、というか警察
じゃ連続失踪事件に移行してるみたいだけど、第一被害者の自宅だ
よ』

「へえ、割と大きい家なんだな」

無駄口を叩きつつインターホンを押そうとすると近くの路地から見
覚えのある人物が出てきた。

長い金髪に見事なスタイル、フェイト・T・ハラオウンの姿がそこ
にあった。

「ありや、ハラウンさん、何でここに？」

「え、滝峰くん？」

「どーも、何やってんの。こんなところで？」

「い、いや別に何も？　滝峰くんこそどうしたの、家、確か川向こうでしょ？」

「んー、小塚さんのせいで噂になってるから知ってると思うけど日々の生活費と学費を稼ぐために探偵業をやっててね。今日は聞き込みしに来たんだ」

「聞き込みって……連続失踪事件の？」

フェイトの言葉に蓮人は僅かに頷く。

と、そこで蓮人は僅かな違和感を覚えた、それが何なのか理解しようとして若干思考の海に沈もうとしたがフェイトが僅かに心配そうに顔を覗き込んできたので思わず半歩下がってしまう。

「……うおっ!？」

「人が連続で居なくなってるんでしょ、大丈夫？」

「ん、大丈夫。こんな仕事やってるからね、わりと安全策は張ってるんだ」

フェイトは蓮人の言葉に成る程、と思う。

フェイトも執務官という職に就いてる分安全策を必ず用意する。

それと似たようなものだろうか、そう言った面では蓮人の口振りからすれば蓮人はすでに何年間かこのような仕事をしていると思われる、フェイトとしてはどのような安全策を取っているか気になるけども一部を除く人達にはただの一般人なのだから聞くのは自重していた。

「さて、俺は仕事をさせてもらうか。じゃあな、ハラウンさん」

「うん、また明日ね」

そうしてフェイトはその場を離れる。

三十分ほど歩き路地に入り込み人が居ないのを確認すると、ソレを展開する。

古来より魔法を使うときに描くとする魔法陣を。

「——なるほど、何か大がかりな魔法を使った痕跡がある。……ん？」

フェイトは唐突に周囲の魔力とその残り香を感知する魔法にそれなりにでかい魔力が放出されているのを感じた。

「しかも二つも……かなり活発にしようされてるし、これは戦闘中？ ……魔力を使用して戦闘している以上管理局の事は知っているはず。行くよ、バルディッシュ」

『Yes , mom』

時間は遡ること十五分前、被害者家族の聞き込みを終え次の被害者宅に向かっていた蓮人は明らかに様子のおかしい女子高生を見つけた、目のハイライトが消え、フラフラと覚束ない足取りで海岸方面に向けて歩いていった。

「おいおい、前の犯行からまだ十五時間だぞ。いくらなんでも早すぎだろ」

蓮人は咄嗟に近寄ろうとするがそこで、歌が耳に聞こえ始めた。その歌を聞いた瞬間意識が遠退き始める、それに気付いた蓮人は懷からカメラを取り出すと急いで疑似メモリを挿入。指示を出す。

「この……歌を……遮断し……ろ……」

『キキッ』

蓮人の指令を受け、バットショットがハウリングタスクで歌を中和する。

それでどうにか意識を戻した蓮人は女子高生を逃がすとバットショットに歌の発信源を逆探知させ、その場に向かう。

「まったく、どこのだいつだ。こんなめんどくさいメモリを売りやがったのは」

グチグチ文句をいい連ねるが現場へ走る彼の足は依然全力疾走を続けている。しばらく走り続けるとようやく海岸が見えてきた。

そして歌は海中から聞こえてくる、エールの推測は正しく海に関連するドーパントのようだ。

砂浜で一旦立ち止まりドーパントがどこから歌を歌っているのか観察する。

その時、海中から襲いかかってくる一つの影があった。

「チツ、不意打ちとは味な真似をするじゃないか」

『よくも狩りの邪魔をしてくれたね、代賞は支払ってもらおうよ!』

そうして口から放たれるのは音波砲。おそらく先程の歌を応用したのだろう。

文字通り音速の攻撃が蓮人に襲いかかる。

ギリギリのところでかわしてはいるがこのままだと攻撃が直撃するだろう。そこで蓮人は一か八かの賭けに出た。

音波砲を避けた次の瞬間一気にドーパントに接近、その体を蹴り飛ばした、その一瞬の内にドライバーを腰に装着、エクスカリバーのメモリを取り出した。

『それはッ!?!』

「さ、お前のターンはここで終わり。ここからは……俺のターンだ」

【EXKALIVER】

【EXKALIVER】

メモリをドライバーに差し込むと蓮人を極光が包み込む。

光がやむとそこに立っていたのは群青色のライダースーツに銀色の僅かな装甲を纏う騎士のような出で立ち、仮面ライダーエヴィアが

ここに降臨。

エヴィアは指をドーパントに突き付けエヴィアを象徴する決め台詞を言い放つ。

「さあ、伝説は伝説へと還るがいい！」

言うが早いかエヴィアは徒手空拳のまま走り出す。

やはりと言うべきかドーパントは音波砲で迎撃するがエヴィアは最小限の動きで避けている。

不可視の攻撃は避けづらいが直進する攻撃ばかりなので回避するのは簡単なのだ。

「そんな攻撃、当たらないよ」

『うつさい！ あんたこそリア充共を排除するの邪魔をしないで！』

「は？ …… つてうおおッ！？」

ドーパントの人を襲う理由を聞いた蓮人、その理由のアホらしさにつつい隙を見せてしまい音波砲の直撃を受けてしまう。

「いや、なんだよその理由！？ 単純に力だけを欲しがってるかと思ったらそんな下らない理由かよ！？」

『やかましい！！ クリスマスに一人で過ごす淋しさを知っているのか！？』

微妙に話に通じていない二人、どうやらドーパントの方が若干精神が暴走しかけているらしい。

事件自体は1ヶ月程前から発生しているらしいので入手からの期間

を鑑みれば暴走していてもおかしくない。

蓮人は舌打ちしつつ再び接近、殴打する。

その時蓮人はふと嫌な予感を覚え……

「ドーパントガードッ!!」

『え、ちょ、何……ってオンドウルラギッタンディスクー!?』

微妙に使いどころの違うセリフを吐きつつドーパントは突如飛来した金色の閃光の奔流に飲み込まれた。

蓮人はドーパントを投げ捨てつつ奔流が出てきた方向を見て口をひきつらせていた、何故なら……

「おいおい、マジかよ……」

先程別れたばかりの人物、フェイト・T・ハラオウンが居たのだから。

第4話 出会いのE / 混乱する戦場（後書き）

と言うことで今回出たのはリア充爆発しろドーパントでした↑

一応何のメモリかは決めてあるんですが今回はフェイトさん……っ
ていうか管理局 side の人との接触を優先させたので名前は出し
ませんでした。

歌と海関連の幻獣やら武具やらなんて限定されてるので一発で分か
ると思います。

次回はフェイトさんとの戦闘及びメモリブレイク回だろうなあ……

第五話 雷光のFノ神速バトル

「おいおい、マジかよ……」

「その変態二人組、武装を解除して投降してください」

「『おいコラ誰が変態だ』」

フエイトのあんまりな扱いに素でつつこんでしまっ変態二人組。
ちなみにドーパントは先程ガードベントに使われたはずだが地味に復活している、いや微妙にまだ痙攣しているのでダメージは残っているらしい、首筋から微妙にメモリが抜けかけてる。

「よし、そのドーパント」

『え』

【EXKALIVER MAXIMUM DRIVE】

『は』

「エクストライクッ!」

『ゴッフオオオツ!?!』

不意打ちの一撃でドーパントはメモリブレイクされてしまう。
その時間こえた音声からメモリがセイレーンと分かったが……ブレイクされたなら気にする必要は無いだろう。

「えっと……今のは」

「気にするな、気にしたら負けだ」

「は、はあ…… ってそうじゃなくて武装を解除して投降してください……」

二人の漫才もどきに毒気を抜かれたのかフェイトは僅かな間呆けるがそこはさすがエース級の実力を持つ執務官。

すぐさま我に帰ると手に握ったデバイス、雷光の戦斧バルディッシュを蓮人に突きつける。

日々ドーパントと対峙する蓮人からすれば迫力に欠けるが先程のドーパントを一撃でメモリブレイク寸前まで追い込んだ攻撃を思えば体に緊張が走る。

（さーと…… どうするかねえ。下手に手を出してやぶ蛇を出すわけにも行かないし……）

後ろ手に握ったスタッグフォンを操作しマシンナイターを呼び出そうとするが最悪なことに電波がが悪く圏外と表示されている。

状況は非常に悪かった。

「親に習わなかったか？ 知らない人には着いていくなつてな。管理局なんざ知らないしな」

「そんなロストログア並みの魔力を持った物を持ちながら管理局の事を知らない？ ふざけるな……」

実際問題として蓮人は管理局を知っているのだがここは知らぬ存ぜぬを貫くべきだろう。

事実フェイトは殺気立ちエヴィアを睨んでくる、スタッグフォンを懐にしまいこみ、フェイトから距離を取る。

先程の攻撃は威力等を見てもかなり高めの攻撃だと思われた。しかしそう言った技ほど発動までに時間をかけなければいけない。

「さーて、ここからは俺のターンだ」

軽く二度跳ね、次の瞬間一気に加速する。

スピードに自信があるフェイト程では無いがそれでも早い事には変わらない、一気に懐に飛び込み肉弾戦に持ち込む。

「……ッ……いきなり襲いかかるなんて卑怯です」

「悪いが戦いに卑怯もラツキヨウもないんだ、よッ!!」

エヴィアが展開しているのは超クロスレンジ戦闘、フェイトの持つバルディッシュは長柄の得物の宿命かクロスレンジ戦闘に対抗するためには不相応だ。

だがあくまで、不相応であって、不可能ではない、エヴィアの攻撃を的確に見切りバルディッシュを一閃。それは見事にエヴィアの装甲を捉えた。

「……まずは一撃、次で仕留める」

【Yes , sir】

「いつつ……、次で仕留める、か。仮面ライダーも舐められたもんだッ!!」

【MURASAME!】

自身の誇りでもある仮面ライダーを侮るかのような発言をしたフェイトにエヴィアは激昂、村雨のメモリを取り出した。ここにはログブレードはない、おそらくムシャにメモリチェンジするのだろう。

【MURASAME!】

「姿が……変わった……?」

メモリを挿し替えるとエヴィアの姿は一瞬水の球体に包まれ次の瞬間球体が弾け先程のような騎士甲冑ではなく日本特有の鎧を纏ったエヴィアが現れた。

「……フッ」

僅かな呼吸音と共にエヴィアは残像を残す程のスピードで駆け出した。

ムシャの特徴である高速移動、そのスピードは僅かながらフェイトをも上回っていた。

「クッ、速い。だけど……負けないッ!!」

フェイトも眦をキツと吊り上げスピードのギアを一気にトップまで引き上げる。

ここまで高速戦闘になったならば対抗できるのは広範囲殲滅攻撃か同じ高速戦闘しかない。

「ハアアアッ!!」

「ツツツッラア!!」

だがエヴィアは失念していた。

本来、ムシヤは近接戦闘用の武器を持って戦うのが基本だ、だがここには近接戦闘用の武器であるログブレードは無く徒手空拳しか出来ない。

そんな要因が相まってエヴィアは徐々に追い詰められていく、そしてとうとう先程のように一撃を貰ってしまった。

「ハッ……ハッ……くそッ」

「ふう……ふう……これまでです。大人しく投降してください」

「やだね、俺は往生際が悪いんだ」

「では……仕方ないですが気絶させてから捕縛します」

フェイトの腕に金色の魔力光が集束し先程の砲撃魔法、サンダースマッシュの発射シークエンスに入る。

エヴィアは舌打ちしながらどうにか回避する方法を考えるが体力が限界に近い今、回避することは難しそうだ。

「悪いな、エール。しばらく会えなくなるかも知れねえ」

『泣き言言っていないでさっさとナイトに戻って。久々の、本当の変身、行くよ』

「ッ!」

【EXKALIVER!】

【shining!】

エヴィアはドライバーの`両端`からメモリを`二本`引き抜き別の二本のメモリを起動させる。
それは約束された勝利の輝きをもたらす`切り札`
それもとびっきりのだ。

「『変身』」

【EXKALIVER】

【shining】

二重の極光が世界を包み込む――

フェイトはロストロギアを使用していた謎の仮面戦士を気絶させるため砲撃魔法を放とうとしていた。
しかし、いざ放とうとした瞬間それは起こった、それはあるいは何かの誕生の瞬間に似ていた。
全てを優しく包み込む光、だがそれでいて邪悪を許さないかのような強烈な光、フェイトはただただそれに圧倒されていた。

「――なんなの、あれは」

呆然と呟く。

あれは一体何なのか、執務官として様々なロストロギアに関わってきたフェイトもあれほどのロストロギアに関わったことなど一度しかない。

「——さあ、お前の罪を数えろ」

唐突に突きつけられた言葉にフェイトはろくに反応出来なかった。ただ、圧倒されながらも自分の役目を忘れず自身の愛機バルディッシュを構えた。

「行くぞ」

「行きます」

同時に放たれた宣言と共に衝撃が結界を突き抜けた。

結果から言おう。

フェイトⅡⅡハラオウンは仮面ライダーエヴィアに敗北した、だが彼女は死なずただ地面に横たわっていた。

「バルディッシュ」

『……』

反応は無いがフェイトそれでも独白を続ける。

「闇の書事件以来だな、この気持ち。——強く、なりたい」

『Yes, we inevitably become strong』

「うん、そうだね。いつかあの人を越えられるように」

負けたがフェイトは強い意思のこもった目で空をいつまでも見上げていた。

その頃エヴィア、蓮人は海鳴沖にある孤島に来ていた。

すでにドーパントとなり人（リア充）を襲っていた人物は捕まえて適当な所に放ってきた。

そして蓮人がここにやって来たのは先程のメモリがセイレーンだからだ、セイレーンは孤島に住む所謂魚人だ。

その美声で人の魂を縛り付け誘拐、惨殺すると言う凶悪な幻獣だ。基本的にセイレーンは女性個体だ、先程のドーパントは渋い三十代男性だからメモリの影響が薄いと見て行方不明の人たちは無事だと判断した。

「さーで、今月は久々に家計が黒字かな」

不謹慎なことを呟きつつ島の海岸に見つけた洞窟に入り込んでいく。ここに来る直前上空から島全体を見回したが人が住んでるような場所は見つけられなかった、そこでセイレーンの生態と鑑みて一番確率

が高そうなのがここだったのだ。

「よし、これで依頼終了」

孤島から拐われていた女学生達を送り届け蓮人は満足そうに呟いた。
あの孤島から町に戻るのには引き潮を待って一時期に出来る道を通れば戻れるのだ。

「見・つ・け・た・ぞ」

「ッ!？」

背後から地を這いずるかのような声が聞こえたかと思ったら肩をが
つちりホールドされた。

振り返ってみればそこにいたのは先程のリア充爆発しろドーパント
の素体の人だ。

幻獣メモリを使えばしばらく肉体の疲労が激しく動けないはずなの
だがこの男性、中々にタフな御仁のようである。

「な、何のようでしょうか」

「惚けるんじゃないよ、仮面ライダー」

「……で、何の用ですか？」

「そう怖い顔するんじゃないよ、別に脅そうって訳じゃない。俺はこう言った仕事してるからな、ネタが欲しいんだよ」

渡された名刺には海鳴広報社の文字が書かれていた。

どうやら記者らしいが蓮人は彼、騎門 紅城にメモリ関連の情報を渡すつもりは無い、が彼も何か考えがあるようだ。

「別にお前さんが仮面ライダーって事をばらそうって訳じゃない、お前さんも知ってるたあ思うがこの町は何年か前から怪奇現象が起きてる」

紅城の言葉に蓮人は頷く。

正確には六年前、この町で謎の現象が起きた、突如巨大な樹が出現し海鳴市中に根を張り巡らしたのだ。

結局あの事件の真相は判明しなかった、あの事件の被害者は捜査の続行を望んだが結局捜査は打ち切りとなった。

「海鳴市民は今起きている様々な事件に不安を覚えている。だがそこに事件に対抗するヒーローが現れたらどうなる？」

「……そのヒーローにすぎるでしょうね」

「そうだろ、お前さんがこの町を守るために戦っていることは分かった。だが……たとえば体を守れたとしても心を守れなかったら意味がねえ、お前さんも守るんなら全部きっちり守ってみせろ」

「体も心も……全部」

（少なくとも俺には目の前で失われそうな命があるならその命に手を差し伸べる……どこまでも届く俺の手、……俺の力で）

「あなたは、仮面ライダーで何をするつもりだ」

「言つたら、希望の象徴だつてな。代わりと言っちゃあなんだがあの化け物どもの情報を渡す、俺らはその仮面ライダーの活躍をスクープする。悪い話じゃねえだろ」

だがそこに事件に対抗するヒーローが現れたらどうなる？」

「……そのヒーローにすぎるでしょうね」

「そうだろ、お前さんがこの町を守るために戦っていることは分かった。だがな……たとえ体を守れたとしても心を守れなかったら意味がねえ、お前さんも守るんなら全部きっちり守ってみせろ」

「体も心も……全部」

（少なくとも俺には目の前で失われそうな命があるならその命に手を差し伸べる……どこまでも届く俺の手、……俺の力で）

「あなたは、仮面ライダーで何をするつもりだ」

「言つたら、希望の象徴だつてな。代わりと言っちゃあなんだがあの化け物どもの情報を渡す、俺らはその仮面ライダーの活躍をスクープする。悪い話じゃねえだろ」

「悪いけどやめておいた方がいい、下手に関わって命を落としたく

「はないだろ」

「こんな因果な仕事やってんだ、命の一つや二つ惜しんでられるか」

「分かった……無理はしないでくださいよ」

「お前こそな」

そこで二人は別れそれぞれが戻るべき場所に戻っていく。

（今月、エールと変身出来るのはあと二、三回。そんな状況に陥ることは無いと思うが……）

蓮人の不安を示すかのように空には暗雲が垂れ込めていた……

第五話 雷光のF／神速バトル（後書き）

次回、仮面ライダーエヴィアは――

「は？ 幽霊列車あ？」

「何でもそれに乗ったら戻ってこれないらしいぜ？」

「今度は烈火の騎士かよ……」

「テストロッサに聞いていたより弱いな」

「いくらあんたが悲しい過去を背負っていたとしてもこの街を泣かせるなら俺が、いや、俺達がとめてやるよ……変身！」

走り続けるT／悲しみの終点

――悲しき想いを断ち切れ、仮面ライダー！

第6話 止まらないT／悲しみの終点

その日、海鳴市某所にあるフェイトⅡⅡハラオウンの自宅にて……

「テストロッサが敗北を喫する程の戦士、か」

「とてもやないけど信じられへんな、フェイトちゃんが負けるなやんて」

「私が負けたのは事実だよ、言い訳をするのがおこがましいと言えるほど完璧にね」

何人が集まった中で桃色の髪をポニーテールにしている女性、シグナムと茶色の短髪の女性、八神はやてがフェイトが敗北を喫したエヴィアに関する情報を閲覧している。

情報自体はろくに無いが戦闘能力のバラメータが表示されている、その戦闘能力の高さにその場にいるメンバーは僅かに驚いた。

「ロストロギアを使っているとは言え、ここまで高い能力を持っているとは……」

「そうやね、捕縛するのは骨が折れそうやね。なのはちゃんから見たらこの人はどう思う？」

部屋の隅で話を聞いていた人物、高町なのははははてに問われ僅かに黙考し自身の考えを話す。

「うん、この人、近接戦闘能力を主軸に戦うつてのは分かってるって思うけど……」

「けど？」

「んー……何て言えばいいのかな、この人が砲撃に撃たれた直後の所出してくれる？」

なのはに言われフェイトが映像を巻き戻し砲撃を撃つ瞬間まで戻し止めた。

なのははじっくり観察しながら口を開いた。

「この人、少しだけだけど変な行動をしてる」

「え、それってどういう意味なの、なのは？」

問われたなのはは確証があるわけでは無い、と前置きしつつ話し出す。

砲撃が放たれる寸前、何かに驚いたかのように顔を上げている、と言われてみれば、とフェイト達がリピート再生されている映像を見直した。

「確かに何かに驚いてるね、バルディッシュ。あの瞬間の結界内の生命反応、出せる？」

フェイトの指令に応え、バルディッシュが追加でスクリーンを写し出した。

だがそこに写し出されたのは周囲には生命反応が無いことを示す画面だけだった、フェイトはその結果に当たり前かと呟きつつ今度は魔力反応を表示させたが。

「魔力反応すら無いとはな……」

「よっぽど凄い気配遮断の魔法を使ったかそもそも魔力以外のエネルギーを使った連絡方法か……それを突き止める分だけ厄介やな」

「加えてこの後の急激な戦闘力の増加。一筋縄で行かなさそうだね」

静まり返るリビングに通信を知らせる音楽が鳴り響いた。

通信に出た一同、通信相手は現在次元世界を航行中であるはずのフエイトの兄、クロノ・ハラオウンだった。

『割り込み失礼、クロノだ。そちらのある地域で魔力反応が検知された、至急調査を頼みたい。出来るか？』

「魔力反応？ 場所は……」

「幽霊列車？ なんだそりゃ？」

「滝峰君、皆の間に流れてる噂くらい知つとこうよ……」

滝峰家にて本日も来訪した小塚に対応している蓮人。

彼女が持つてくる情報は無視できない物があるので蓮人は一応聞いておくことにしている。

何より女子学生という物は昔から噂好きだ、蓮人が入手出来ない情報も持っている可能性があるのだ。

「おいおい、中学生になってまでするような噂かよ。受験生らしく勉強でもしてろっての」

「ただの噂だったら良かったんだけどね……」

「へえ、何かあったの？」

「これ見て」

手渡されたのは菊の紋章が書かれ『部外秘』の印が押された封筒。毎度思うのだが小塚はどこからこのような物入手しているのだろう……聞いたら聞いたで恐ろしそうではあるが。

「電車に乗って帰っていた隣の女子大生が行方不明。電車から降りた形跡無し、現在も搜索継続中だが発見の可能性は低い。集団による誘拐も視野に入れて捜査中、か」

確かにこれは妙な事態だろう。

多くの人が乗るなかで一人忽然と姿を消す、言うは易いがやるには難し、と言ったところか。

これだけの情報では何も掴めない、まずは情報収集が先決と言うべきか。

「さて、小塚さん。その幽霊列車の出現時間帯教えてくれない？」

「それなら大丈夫よ、ほら、入ってきてください」

小塚に招き入れられたのは1人の女子大生。恐らくこの事件の被害者の友人だろう、蓮人は居住まいを正すと話を聞く体勢をとる。

「それじゃ、幽霊列車に関する情報と名前を教えてください」

「はい、私は鴛貞 さやかと申します。そもその幽霊列車の噂が流れたのがいつ頃か、というのは今一はつきりしません」

その後の話を纏めるところだ。

幽霊列車が現れる時間は特段に決まっていはいない、霧が深い逢魔ヶ時、つまり夕方頃に出るそう。普通ならその時間帯に霧は出ない、その時点で既におかしい。

夕方に現れた列車は何かを待つかのようにしばらく停車したあと何処かに走り去っていくそう。

「……妙だな」

「ん、どうしたの蓮人」

「いや、警察の資料で見たら被害者の白戸 美穂さんが居なくなっただのはごく普通の電車の中。対して鴛貞さんの話では白戸さんが居なくなっただのは幽霊列車になってる、そこが気になってな」

「噂ってのはそんなものでしょ、何か怪奇現象が起きたら納得のいくものに原因を押し付ける、特に女にはその傾向が顕著ね。訳がわからないわ」

「いや、お前もその女の中の一人だろ。……それは置いて、鴛貞さん、お話ありがとうございます。非常に参考になります」

「いえ、これくらいの事しかご協力できませんし……」

はにかむ鴛貞は席を立つと滝峰家を辞した。

一方蓮人はガタツクフォンを取り出すとある場所へ電話を掛ける。

「騎門 紅城さんのお電話でしょうか、私、滝峰探偵事務所の」

『いちいちそんな堅苦しく挨拶しないでいいからな、そんな礼儀正しいお前なんてお前じゃねえ』

「ずいぶん言い草だなこの野郎。……調べて欲しい事がある、最近噂になつてゐる幽霊列車についてと」

そこで一旦口を閉ざした蓮人は席から離れ家の奥にある自室に向けて歩き出した。

思考の渦にはまりながらもそれでも考え続ける。

「鴉貞 さやか、幽霊列車の被害者の友人についても調べて欲しい」

『あん？ 何で被害者の友人まで調べなきゃいけないんだ？』

「彼女の証言はいろいろ引つ掛かるところがあつてな……どういった人物なのか知りたい」

『わあーった、調べといてやらあ。その代わり』

「分かつてる、事前に連絡するよ」

「ありがとな、インテレ。今度インスタント風麺奢るよ」

「おお、サンキュー！ あ、これはサービス情報。タダだから報酬は要らないよ、この前行方不明になった女子大生、知ってる？」

「行方不明になった女子大生ってさっきまで話してた被害者じゃないか」

「それが違うんだよ！ 何でも蓮ちゃんを探してる女子大生の親友が全く同じ状況で居なくなっただってさ」

「なに！？ それって……」

「何でも第一被害者捜すために限りなく同じ条件揃えて乗ったら居なくなっただってさ。その条件つてのは学生であることだって」
全く同じ条件で消えた二人、捜索も続けられているが見つかる可能性は低いだろう。

同じ時間、同じ状況、何故二人は居なくなったのか。

「実際に乗ってみるか……？」

（だが、詳細な条件がわからない……対策を立てない内に迂闊に動くのは得策じゃ）

『対策なんざ動きながら立てりゃ良いッ！！』

懐かしい声が脳内に響く。

蓮人は僅かに口を吊り上げるとインテレに礼を言つとスタッグフオンで紅城を呼び足しつつ走り続ける。

『おう、お前か。なんか頼まれていた事が分かったから連絡しようと思ってたんだ』

「そうか、こつちもちょっと行動を始めようとしてたところだ。騎門」

『なんだ？』

「幽霊列車と一緒に乗る勇氣はあるかい？」

第6話 止まらないT／悲しみの終点（後書き）

次回、仮面ライダーエヴィア

『やれやれ、少しは相談してほしかったよ』

「なんっだこりゃあああっ!？」

「レヴァンティン、行くぞ」

「あんたはおき続ける悲劇を止めたかったんだな……」

次回、第7話 終末のT／終電列車は朝焼けに

哀しき想いを絶ち切れ、仮面ライダー！

第7話 終末のT／終電列車は朝焼けに

「それで、今、俺たちは、走ってる訳か！」

「まあな！ こういうのは、現地調査が、基本だろっ！」

海鳴市を駆ける二人の男性の姿、歳は親子ほども離れているのにお互いの口調はフランクだ。

その二人、滝峰 蓮人と騎門 紅城は現在海鳴駅に向けて全力疾走中だ。幽霊列車の出現条件は霧が出ている事ぐらいしか分かっていない、だが先程インテレと騎門の情報で分かった事がある。

「まさか電車まで限定されるとはなあ……………」

「それと、例の依頼人の事だが……………」

「ああ、どうだった、……………うん？」

走っている最中、妙に目立つピンク色のポニーテールが視界の端に映り僅かにそちらに気が向いてしまう。

が、すぐに首を戻して走り続けた。

その後に聞いた話しはかなり衝撃的であったが。

「む、なんだ……………」

『どうかしめたかー？』

『いや、何でもなし。調査報告の続きを頼む、リイン』

『はいです、幽霊列車の話自体は数十年前から受け継がれているそうです。また、列車が出現する霧は常に月末の一週間の間に発生するそうです』

『よく一週間の間に調べられたものだな』

魔法の基礎である念話を使用して話し合うシグナムとリインフォー
スツヴァイ。

その内容は先程蓮人が話していた幽霊列車と同種のもの、どうやらこの二人もかの列車に乗り込むつもりようだ。

『さて、駅も見えてきた。一端念話を切るぞ』

『了解です、吉報を待つてるですよ』

『なかなかハードルを上げてくれるな、ならその期待に答えてみようか』

にやりと凄みのある笑みを浮かべてシグナムは歩を進める。

向かうは海鳴駅、そしてそこに着くであろう幽霊列車の元にだ。

「この電車だっけ？」

「だな……、出るのもうすぐみたいだ」

二人が駅に着き、ちょうど着いていた電車に乗り込んだ。

いざというときの為にすでに腰にドライバを装着してはいるが蓮人としては使う事態にならないことを祈ってはいるが。

「やれやれ、何とか間に合ったか」

「……」

蓮人は自身の後に乗ってきた乗客に目を向けた。

桃色の髪に見事なプロポーションを誇る女性だった、だが蓮人が注目するのはその体捌きだ。揺らぎの無い一本筋が入っているかのように体幹が一切ぶれていない。

（あんまりじろじろ見るのも失礼か……）

そう考えすぐさま視線を外す、向こう側から感じ取っていた視線も目を外した時点で外されていた。

『本日は……』

アナウンスを聞き流しながら蓮人は席に着くと目を閉じた。

もはや賽は投げられた、蓮人は静かに列車が動き出すのを待つ。

隣で紅城も取材のためにカメラの準備をしている、彼も記者魂を煽

られているのだろうか。

異常は唐突に発生した。最初は僅かに電車が揺れたかと思われたのだが徐々に揺れは大きくなっていく。だがそれ以上におかしいのは他の客がそれに気づいていないことだ。これだけの揺れである、誰かが気付いてもおかしくはない、なのに誰一人として気付いてはいないのだ。

「紅城、そろそろ来るぞ」

「分かった、しかし何で皆気付かねえんだ？」

「さあな、認識されないよう阻害されているか、俺たちの気が狂ったかの二択だろうよ」

「後者は御免被りたいね」

かすかに言葉を交わしている途中でトンネルに入って一瞬暗くなるが電気によって内部は明るいまま……の筈だった。

「なんだ！？」

「なんッじゃこりゃあああッ！？」

明るさが変化する事で一時的に視界は悪くなる。異変はその間に起きていた。

床は金属から木製に窓も今のように固定タイプではなくとも簡単に開けられるようになっていた。

そう、現在の電車からは考えられないような古いタイプの電車、いや、機関車に変化していた。

客も当然いない、まるで神隠しのようだ。

「……紅城、これは」

「俺に聞くな、気が付いたら無人列車なんつーオカルトに実際に巻き込まれるとは思わなかった」

「だよな、考えられるメモリはゴーストか、はたまたバンガフルか……」

「バンガフル？　なんだそりゃ」

「ゴーストの一種だよ、死霊の事さ。ゴーストにもいろんなのが居るからな、生き霊、地縛霊、守護霊……有名どころはここらかな。さて、変身！」

【EXKALIBER！】

【EXKALIBER！】

エヴィアへと変身した蓮人は騎門を掴むと一気に後ろへ飛びすすった。直後そこに落ちてきたのは何か赤黒い物体、その醜悪な様相に騎門は思わず顔を背けた。

「う、な、なんなんだよ、こいつ!？」

「人間、だな。それもかなり凶悪な衝撃を喰らった、な」

「凶悪な衝撃……まさか、な」

「なんだ、どうした？」

「いやな、幽霊列車つー事で海鳴線の歴史をさらっと調べたんだが……海鳴線でな、列車事故が起きたらしいんだよ」

「そしてこの列車はその怨念が集まって出来たって訳か」

「だろうよ、さて、仮面ライダーエヴィア、死んでいるとは言え救いを求めている奴等がいる。どうする？」

「当然、助ける、今までも、そしてこれからも!」

ゆつくりと二人は先頭車両に向けて歩き出した。

騎門も蓮人も職業柄酷い有り様の人間は見てきた、だから我慢出来るが長く居たいとは思わない。

そして何よりもここに囚われている哀れな魂達を解放してやりたいのだ。

弱々しく体を掴んでくる怨念の腕を一つ一つ丁寧に外し先頭車両に向かう、助けてと言う声が呪いのように絡み付くがそれでも二人は突き進む。

絶対に救ってやる、そんな思いを込めて歩き続ける。

「仮面ライダー……?」

唐突に後ろからかけられた声。死者の生気の無い声ばかり聞こえる

この場で聞こえるその声は生氣に満ち溢れていた。

だがその声には僅かばかりの敵意も含まれていた、その敵意にエヴィアは反応してしまった。

敵意に反応し、裏拳を振るう。対し後方に居た彼女、シグナムは高速で起動したレヴァンティンの鞘でガード、攻撃を加えられた事に対する条件反射でレヴァンティンを抜き放ち斬りかかる。

が、それはエヴィアの横に居た騎門が居たため僅かに動きが鈍る。それを好機と見たエヴィアは腹部に掌底を叩き込み距離を取らせた。だがシグナムも歴戦の勇士、動きを止めることなく突きを放とうとし、

「やめーいッ!」

「うおっ!」

「なッ!」

間に割って入った騎門に止められた。

騎門としては突然の戦闘に慌てていたのだが生身で戦うシグナム（生身ではないが）が何かしらの用事でここに居ると判断、それを聞き出すために二人の戦闘を止めさせたのだ。

「そのあなた、何の用事でここに居るかは知らんがこの仮面ライダーを斬ってもらっちゃ困るんだよ」

「どういう意味だ？」

「仮面ライダーはこの町の正義の象徴、こっちはそれをネタに記事書いてんだ。そんな旨いネタをやるわけねえだろ？」

（騎門、微妙に私欲が混じってるぞ……）

「しかし、そいつは危険物を持っているだろう。危なくは無いのかな？」

シグナムと騎門の舌戦にエヴィアは混じれないが、今はこの列車を何とかすべきと思う。しかし、今一人で動くのは得策では無いだろう。それ故に……

「そんなに気になるなら着いてくればいいじゃねえか。そっちの方が手っ取り早い」

「そして私を倒すつもりか？」

テストロッサとの戦闘でこちらに対して友好的な感情は持っていないはずだ、とシグナムは思考する。そしてそれは半分正解であった。蓮人からすれば六年前に発生したジュエルシードの暴走によって出現した巨大樹などの事件で起きた被害は看過できない物だ。正直に言えば厄介事しか呼び込まない魔法を忌避している。

「そう思いたいなら勝手に思ってる、俺はこの列車に乗せられたまま苦しんでるこいつらを解放したい、それだけだ」

それだけ言い残すとさっさと先頭車両に向けて再び歩き出した。今は自分の些細な因縁に拘っている場合ではないと思っているからだ、拐われた被害者を救出、そしてここに居る亡霊達を葬ってやることが重要だ。

「……好き勝手言ってくれる、こちらとて似たような志を持っていると言っのに」

シグナムの呟きは先行した二人に聞こえず空に溶けて消えた。
その背中是将と言われ主を守護していたときより小さく見えた。

先ほどの会話から数分、既に幾つもの車両を潜り抜けてはいるが一向に先頭車両にたどり着けていなかった。

何度潜り抜けても現れるのは牽引されている車両のみ、その動きが五十を越えたとき生身のままの騎門が一番に根をあげた。もともと異常なこの空間で我慢し続けた彼は最も精神力が強いだろう、だがそれも長時間は続かない。

「ダメだ、これ以上ここにいたら気が狂っちまいそうだ」

「大丈夫か、騎門。どっかで休むか？ 生身のお前じゃ耐えきれないだろ」

「舐めんじゃねえよ、と言いたところだがそうさせてもらっぜ。
水でも飲んだら落ち着くさ」

ははは、と騎門が疲れたように渴いた笑い声を上げるがやはりどことなく元気が無い、蓮人も早くこの異常事態を処理するべきと解決策を模索するが手掛かりは一つも無い。

その時、騎門の水という単語に反応した亡霊達から何かが吹き出て一つの異形を象った。

「なんだッ！？」

「騎門、下がって！」

シグナムと蓮人が前に出てその異形から騎門を隠す。

異形は静かに、滑るように二人に接近してくる、重厚感溢れるその姿からは考えられないような動きをする。

「クッ……先手を取らせてもらっ！」

「あ、おい待て！」

駆け出すシグナムをひき止めようとするが彼女はそれを振り切つてレヴァンティンを異形に振るう。だが仮にも将と言われた彼女の斬撃を異形はノーガードで受けきった。

「なにッ！？」

「ああもう、言わんこっちゃない！」

反撃を喰らいそうになったシグナムを抱えて後ろに飛び下がった蓮人は、ポイとシグナムを放り捨て異形、ヴィンディクティヴに殴りかかる。が、

「いつてえ！？」

ヴィンディクティヴのあまりの硬さに思わず動きを止めてしまった。その隙を突いてヴィンディクティヴが攻撃するが蓮人は何とかその攻撃をかわす、そしてもう一度拳を打ち付けるがやはり固く、ダメージは通らない。

「ああくそ、管理局員、あんたの武器少し貸せ！」

「ば、バカを言うな！ 騎士の誇りである武器を貸せるはずが無いだろう！」

「はあッ！？ 今は誇りとかそんなもんには構ってて場合じやねえだろ！」

チツ、と舌打ちをしつつヴィンディクティヴの攻撃をいなし突き飛ばす。

硬さは相当だが自重は軽いらしく簡単に突き飛ばされた、が、肉弾戦しか手がない蓮人はヴィンディクティヴを倒す手段が無い。

「クソツタレ、ログブレードがあればな……」

あれだけ硬いのだ、デュランダルが一番効くのだろう、と蓮人は思う。

デュランダルは岩をも斬れるすさまじい切れ味を誇る、それがあればいとも容易く斬れるだろう。

「しばらくはスピードで攪乱するのが得策か？」

【MURASAME！】

【MURASAME！】

エヴィアの姿が水を纏ったムシャフォームに変化する。狭い車内では派手に動き回れないがヴィンディクティヴを攪乱するだけの機動は可能だ。

「ああ、そういや……何でこいつは現れたんだ？」

蓮人はふとヴィンディクティヴが現れた原因を思い出そうとするが、どうにもわからない。

騎門を休ませるために少し止まった時に突然現れたヴィンディクティヴ、その時は周囲の亡霊から何かが出ていたような感じに蓮人は見えていた。

（こいつらは事故でこんな亡霊になった……そしてこいつはその亡霊から出てきた、事故の後救出に時間がかかったらしい。時間がかればその分喉が乾く、そして彼らは水を欲する……そう言うことか！）

蓮人はムシャフォームの属性である水をヴィンディクティヴに叩きつけた、ここに居る亡霊は共通して水を欲している。ならばあれは水を欲する思念が形になったものではないかと推測したのだ。そしてその推測は当たりだった、ヴィンディクティヴは水に当たった所から白煙を上げてその姿を揺らめかせている。

「あんた達が望むもの、受けとれッ！！」

水流に飲まれヴィンディクティヴは消えていった、同時に求めている物を満たされた亡霊も成仏していく。

「やれやれ、成仏してくれたか」

「彼らが求めたのは水だったのか……」

「しかし、60年以上前の亡霊が何で今になって騒ぎだしたのかね？」

「さあな、管理局さんは何か知らないのかい？」

「……ここにDead Revivalと呼ばれるロストログアがある、恐らくその影響だろう」

「Dead Revival、ねえ。よくそんな下らない物を考え付けるものだ、死者は何をしようと蘇らない。それは世界の理に定められた事であるのに」

「そうだな、一度喪ったものは決して取り戻せない」

蓮人の言葉にシグナムが弱々しく同意する、彼女の脳裏に浮かぶのは初代祝福の風の後ろ姿。彼女は主に形見を残し消えた、今はもうその姿は記憶の中でしか見ることは出来ない。

「Dead Revivalは先頭車両にあるはずだ、今なら道が開かれているだろう」

シグナムは過去の記憶を振り払い先頭車両に向かって歩く、エヴィアはわずかにシグナムの様子に違和感を覚えたが大人しく着いていく。

「これがDead Revival……？」

蓮人は驚いたように小さく呟く。それも仕方ないだろう、彼らの前にあるのは小さな懐中時計。とてもではないが死者蘇生に使えるとは思えない、思わず手にとって調べようとしたがシグナムに止められた。

「下手に触らない方がいい、私が封印処理をしてからにしてくれ」

そう言うとシグナムはDead Revivalに手をかざし魔方阵を展開する。そしてそこから出てきた焰の鎖が懐中時計を包み込んだ、そして焰に包み込まれた懐中時計は進めていた針をゆっくりと止めた。

「これで封印処理は完了だ、これは回収させてもらう」

「分かってるよ、さすがに魔法関連は門外漢だ」

「それとそちらの記者さんはこの事を記事にしないでほしい」

「記者に記事にするあたあい度胸してんな、って言いたい所だが、しゃあねえな。魔法なんつー非常識なもんを記事にするわけにはいかねえしな」

「黙秘に関する協力感謝します、それでは……」

とDead Revivalをとろうとした時、何者かがそれを横から掠め取った。

「ッ！？ 何者だ！！」

「しがない死霊使いですよ、せつかく人が行っていた実験を邪魔をしてくれて……感謝料を払ってもらいたい位なんですよ？」

「実験だと……ふざけるなッ！！ 人の想いを玩んで……何が実験だッ！！」

「おやおや、今代の仮面ライダーは気が短くいらっしゃる。もっと大人になったらどうですか？ それか君の大師匠のようにハードボイルドを目指すとか、ね」

死霊使いの挑発に一気に怒りが沸点を越える、自身の正体を知っているという事がそれを更に加速させた。

「黙れエエエエエエエツ！！」

「エヴィアッ！？」

「安い挑発に乗ってんじゃねえよ！！」

シグナムと騎門の制止の音が響くが蓮人は止まらず死霊使いに殴りかかる。

死霊使いはドーパントと化しているその顔を僅かに哄笑を浮かべるとカウンター気味に蓮人を殴り飛ばした。

「やれやれ、本当に気が短いんですね。もっと精進してくる事ですね、その程度では『E』に勝てませんよ？」

その言葉を残し、バンガフラードーパントは姿を消した。場に沈黙が流れる、蓮人は死霊使いを追おうと起き上がるうとした

がダメージが大きく上手く動けない。

「それにしても何時になったらこの列車は消えるんだ？ 核になつてたロストロギアとか言う物は消えたんだからこの列車は消えるはずだろ？」

「そうだと思つたんだが……む」

『次は黄泉平津坂前ー、生者の方はこちらでお降りください』

「……危つく死者の世界に行くところだったみたいだな」

「ああ、私が行けるとは思わないが」

後半の言葉が聞き取れなかったのか騎門が聞き返したがシグナムは何でもないと言うように手を振った。騎門は僅かに首を捻ったがエヴィアを担ぎ上げると列車から降りようとしたが……

「待……て、まだ、被害者を……見付けていない」

「チッ、そうだったな。被害者を見つけねえと」

『……その心配はありませんよ』

「その声、鵜貞さん、か？ 何故……」

「……坊主、言い忘れてたんだがよ、海鳴大学に鵜貞 さやかなんつー学生は居なかった」

「な、に？」

『ええ、あの時私は嘘を吐きました。私は海鳴大学の学生ではありません、いえ、今生の命ですらありません』

「幽霊列車を調べる時に知ったんだけどよ、集団疎開をしたメンバーの中に鴛貞さやか、つまり彼女の名前があっただよ」

「死者からの依頼、か」

『今になって黄泉帰りをしたあの子達を鎮められる力を持っていた貴方と彼女をここに呼び寄せました、記者さんは予想外でしたが』

巻き込まれただけと知りガックリとうなだれた騎門。彼は元々巻き込まれるつもりで来たのだがこうも暗に邪魔者と言われるといういるものがあるのだろう。

『それと、貴方が探していた二人は既に駅に下ろしています。ここに来たときのショックでいまだ寝たままですがここから出ればじきに目を覚ますでしょう』

「あんたは……」

『この子達を連れて黄泉に戻り、閻魔様の裁定を待ちます。いずれこの世に何らかの形で再び生を受けると思います……時間のようです、さあ列車からお降りください』

さやかに押され列車から降りた二人、別れを惜しみつつさやかは去っていった。

さまざまな事があったこの事件、明らかにこの世の出来事では無かったがそれでも蓮人は関わられて良かったと思う。やがて列車は朝焼

けの中に消えていった。

「さて、管理局員さん。あんたにも世話になったな、礼を言う」

「いや、こちらも知らず知らずの内に助けられていた。体は大丈夫か？」

「何とか、な。そついや名前を知らなかったな、名は？」

「シグナム、夜天の王を守るヴォルケンリッターの将、シグナムだ」

「こつちも名を明かしたい所だが生憎とそれじゃあ仮面を付けている意味がないからな、エヴィアを通してくれ」

仕方ない、とでも言うようにシグナムは肩を竦めた。

同時に周囲の風景が揺らぎ周囲は蓮人にとって見覚えのある丘だった、そしてシグナムにも。

「さて、俺達は帰らさせてもらっぜ。一晚留守にして相棒も待つてるだろうしな」

あつさりとまず帰ったのは蓮人、彼はもう依頼を終えている。

ここに長居する理由はない。

それは騎門にも言えることで被害者の片割れ、白戸 美穂を担いだまま坂を下っていった。

二人が見えなくなった後、シグナムは「ソコ」に目を向けた。

「なあ、私は道を間違わずに進めているのか？ ———— 答え
てくれ」

リインフォース、とシグナムはポツリと呟いた。

第7話 終末のT／終電列車は朝焼けに（後書き）

次回、仮面ライダーエヴィアは

「被害者欄？ ……小塚 真実！？」

「私だって分からないわよ、気が付いたらこうなってたんだから…
…犯人、社会的にマミらせてやるつかしら？」

「お前、そういう奴だったんだな……」

哀しき思いを断ち切れ、仮面ライダー！

第8話 被害者K／想いの軌跡

幽霊列車の事件から数日、蓮人は自宅のパソコンの前で唸っていた。表示されているのは銀行の預金金額なのだが、その数値が明らかにね上がっていた。

「どういうこっちゃ……」

「どうしたの、蓮人？」

「いや、貯金が一気に増えてんだよ」

「ああ、それなら鴉貞さんが振り込んでくれたよ。感謝と救助のお礼だって」

「鴉貞さんが、ねえ。そーいや騎門の奴、助けた女子大生に引っ付かれてるみたいだな」

思い出したかのように蓮人が呟くとエールは興味が湧いたのか身を乗り出して詳しい事を聞き出し始めた。

蓮人が聞いたのは朝起きたら何故かマンションの自分の部屋に居てしかも朝食を作っていたらしい。しかも何故か仕事着も用意されていたのが恐怖を煽ったらしくその日一日騎門は青ざめた顔で過ごしていた。

「それはとても面白い、あのぶっきらぼうな騎門がこうも振り回されるとは」

「確かなー、あいつが何でこうも気に入られたのか分からんし、

その良妻賢母ぶりが騎門の生活を狂わせてるな」

「まあ、元々記者なんて体が壊れやすい職に就いてるんだしちょうど良いんじゃないの？」

「それもそうか……どした？」

「いや、あれ……」

エールが指したのはテレビ。チャンネルはニュースに合わされているが今流されているのは女性を狙った通り魔らしいのだが……

「最近はわりと怖いよなー、で、あのニュースがどうかした……のか……」

『被害者の小塚真実さんは現在、海鳴病院に収容され治療を受けており……』

「病院に行くてくる」

「行ってらっしゃい。小塚さんによろしく」

「で、何があつたんだ？」

「主語を抜かすな。私も何がなんだか分からないのよ、いきなり後ろからスタンガンでバチッ！ それだけよ、まあかろうじて犯人がドーパントって事だけは確認したけどね」

はあ、と相変わらずの小塚に蓮人は嘆息する。この女性は殺しても性格は変わらないだろう。

そう言えば蓮人は小塚の事をよく知らない、厄介な事件を持ち込んでくる、警察の捜査資料等をどこからともなく取ってくる。こうしてみると割り和小塚真実と言う人物の事を蓮人は詳しく知らない、その事に僅かに驚いたが表情には出さない。

「それにしても犯人め……社会的にマミってやろうかしら」

「シャレにならんからやめい。さて、俺は捜査に入るが小塚はどうする？ 傷は大したこと無いんだろ？」

「まあね、でも大事はとっておくわ。ああ、それと警察の捜査資料はあとで届くようにしといたから、ちゃんと見なさいよ？」

「またお前はどっからそんなもん……」

呆れ果てた蓮人は1つため息を残すと席を立った。

情報は非常に少ない、蓮人は気合いを1つ入れると病院の外に向かって歩き出した。

病院の正面玄関を出た蓮人はふと後ろを振り返った。海鳴総合病院、海鳴市最大の医療機関であり何らかの怪我人は大抵ここに搬送される……かつての蓮人も、だ。

「……未確認生命体第0号、あの事件は終わったけど、まだ苦しんでいる人は居るんだろうな」

史上最悪の被害者を出した第0号による無差別殺人事件、それからすでに十年の時が過ぎようとしている。

かく言う蓮人もあの事件の被害者の一人だ、親が殺され、妹が殺され、そして最後に自分が殺されそうになった。だが、何の因果か自分は生き残った、同じ未確認である第4号の手によって。

「4号……、結局最後まで同族を殺し続けた未確認。だけど、彼は本当に未確認だったのか？」

長年蓮人の中に渦巻いてきた疑問、同じ未確認である筈なのに4号はずっと人間を助け続けた。戦って戦って、その果てに彼は世間から消えた。役目は終わったとばかりにその姿を眩ましたのだ。

「……考えるだけ無駄か、今は事件解決に尽くそう」

病院に背を向け歩き出す。彼がすべきなのは事件の解決、警察も動いている、早急にケリをつけるべきだろう。

「……ん、あんがとな骨」

「だから亜茨だったの！ それにしてもホントに探偵やってるとはな」

「生活費確保のためだよ、わりと大食らいがいるからバイトじゃ間に合わないんだよ」

翌日、聖祥中学校で蓮人は亜茨から情報を得ていた。と言っても一般に出回っているような物でしかないが。

どうやらこの事件は奇妙な点がいくつか見受けられた、まず襲われた方がバラバラな事、これだけなら複数犯と取れるが問題は被害者が全員必ず特定のドーパントを見ている。だが、そのドーパントが装備しているのは刀、小塚はスタンガンのような電気関連の物にやられたと言っていたにも関わらず電気関連のドーパントでは無いと言うことが気にかかる。

「やっぱ複数犯なのか……いや、でもなドーパントが複数の攻撃を持っている可能性もあり得るし……」

複数の可能性が頭の中で渦巻き蓮人の思考を乱す、ガシガシと頭を掻いて情報を纏めようとするが今一纏まりきらない。

手帳に通りの情報は纏めているが今一つながりが見えてこない、最近のこの街に流れるメモリは増大の一途を辿っている。それに伴いメモリの被害は多様化し捜査に手間がかかるのだ。

「ホント変な事件だよなー、なんで女性ばかり。まるで未確認の仕業みたいだよ」

はあ、と亜茨のため息が教室の端で溶けて消えた。それは確かに、と蓮人も思う。未確認はなんらかのルールに則って殺戮を行っていた、今回の事件も女性ばかりを狙った犯行が行われている。だがその女性の中には共通点が見えてこない、何度見直しても全く違うとしか言いようがない。

（……共通点、が無い？）

「いや……そんな訳ないか。女性って共通点はあるし」

ふと頭によぎった可能性を否定する、未確認のような、と言われあり得ない可能性を考えてしまった。

それは共通点が無い、という事。だが、それを実証する証拠も存在していない。

亜茨は蓮人の意見が聞きたいのかじつと見ていたが蓮人はカバンを担ぐとさつさと教室から出ていった。

考えが纏まらない内に下手な考えを話さない、蓮人が探偵業を行う上で自身に課したルールだ。下手な考えを出せばそれに思考が固定される、柔軟な発想を以て事件を解決に導かなくてはならない。

「……………」

歩きながら狙われた女性の特徴を考える、女性、職業、趣味、世代、そのすべてが何一つ噛み合わない。

蓮人は屋上に設置されているベンチに腰掛け空を見上げた。

雲一つ無い青空、気が付いたら吸い込まれていそうだがそんな澄み渡った空を見ても蓮人の心は晴れることが無い。

「そもそもなんで全くバラバラの人物ばかり狙うんだ？ そっちの

方が足がつきにくいつてのは分かるけど、こっちからしたら面倒なことこの上ないよな」

身勝手な考えだが、事件は解決しやすければしやすいほどいい。それが人が傷つくような類の事件であればなおさらそちらのほうがよい。

「うーむ」

「ありや、滝峰君やん。珍しいなあ、放課後こんなところに来るなんて」

「よー、八神。何となく気持ち悪かったからな、ちょいと涼みに来ただけだ」

ふーん、と何が可笑しいのか笑いながら隣に腰かけた。ちらりと蓮人を見たがすぐに視線をそらすと並んで空を見上げてぼんやりとしていた。

ただ流れていく時間、そんな中ふとはやてが蓮人に話しかけた。

「なーあ、滝峰君」

「なんだ」

「何かさー、こっやつとると事件とか起きとるんが信じられんなあ」

目を細めて空を見上げるはやての言葉にどこか引き込まれるような感覚を覚えるが蓮人は気にせず耳を傾ける。

はやての話しは人を引きつける、同時にそれ相応の敵を作ることもあるが。

「なんで人って罪を犯すのかなあ、うちにはよわからんわ。こんなに幸せが満ちとんのにそれ以上を求めるんや、それって罰あたりやないかな？」

「罰当たりなもんか、何かを求めるのは大事なことなんだよ。変容と進化を求めるのは人の性、それは伝承の時代から変わることない不文律なんだよ」

哲学的な話を続けるはやてと蓮人、どちらも憂いを帯びた目で意見をぶつけ合う。

人はなぜ今よりもっと多くの物を望むのか、そしてそれは善か悪か、その答えはない。

と、そんな時突然はやてが吹き出した。訝しげに蓮人が見つめるがはやてはクスクスと笑い続けるばかりだ。

「なにがおかしいんだよ、八神」

「うちらがこんな風に話しょある事がおかしゅうてな。ゴメンな、別に滝峰君の事笑うたわけちゃうんで？ ただの中学生がこんな事話すなんてな……ククッ」

どうやら先ほどのシリアスな空気がツボに入ったらしい、いまだ笑いを堪えているはやてをじっと見据えたが蓮人は一つため息を吐いて立ち上がった。

「そんじゃ、俺は先に帰るわ。時間が遅いんだからさっさと帰れよ？」

「分かるとるよ、それにそれなりに護身の方法身に付けとるから大

丈夫やよ」

変わらない笑顔で屋上を去っていく。それを見送ったしばらく後、蓮人はカバンを担ぎあげ屋上を去っていた。

そして、その翌日、事態は急変した。新たな被害者が出たのだ。

その被害者の名は

八神はやて

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5230n/>

仮面ライダーエヴィア 『伝説』を背負う戦士

2011年11月4日21時15分発行